東京音楽大学リポジトリ
Tokyo College of Music Repository

大正～昭和初年代の映画館の音楽と楽士：管弦楽普及の過程

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2022-02-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 武石, みどり, Takeishi, Midori メールアドレス: 所属:
URL	https://tokyo-ondai.repo.nii.ac.jp/records/1437

大正～昭和初年代の映画館の音楽と楽士

―管弦楽普及の過程―

武　石　み　ど　り

東京音楽大学研究紀要　第45集　－2021－

大正～昭和初年代の映画館の音楽と楽士
―管弦楽普及の過程―

武石みどり

日本における洋楽合奏は、すでに明治の前半から軍楽隊や伶人たち、そして東京音楽学校の学生によって開始され、次第に吹奏楽のみならず弦楽器を含む編成へと拡大した。明治40年代には一般大学のオーケストラや三越少年音楽隊の演奏が始まり、大正期には浅草オペラが盛んになった。こうして一般の人々がいろいろな所で洋楽合奏を聞けるようになった大正期後半、映画館での洋楽合奏の記録が見え始める。無声映画（活動写真）に音楽を付けていたこの時代、映画館の洋楽合奏はどのような人によって担われ、どのような楽曲が演奏されたのであろうか。また、昭和初年に交響楽団設立への動きが加速する中で、映画館の音楽と楽士はどのような役割を果たしたのであろうか。

本論文においては映画館で奏された音楽に注目し、現存する映画館の週報を手掛かりとして、演奏された楽曲と演奏形態の実態と変遷を明らかにすることを試みる。大正期の東京の映画館の中で、ここでは14館（浅草帝国館・浅草電気館・浅草松竹館・赤坂葵館・浅草三友館・神田日活館・浅草富士館・新宿武蔵野館・銀座金春館・神田東洋キネマ・目黒キネマ・神田シネマパレス・芝園館・有楽町邦楽座）を対象として、現存する1916～29年までの週報合計2250枚を調査した。館ごとの収集資料数は表１に示すとおりである。週報には写真１のように演奏曲目と演奏者が明記されているものと、音楽に関して全く言及のないものとがある。本研究では前者の情報に加えて、雑誌記事や先行研究を参照して音楽に関わる情報を集積した。

写真1　目黒キネマ 1923/11/2

1．演奏団体の規模と名称

当時の映画館では、無声映画の上映に合わせて伴奏音楽を付けることから開始し、次第に映画開始前や休憩時間に「（休憩）奏楽」として楽曲の演奏を聴かせるようになった。洋画の雰囲気に合わせるために洋楽合奏という形態が

表1　収集した映画館週報

	浅草帝国館	浅草電気館	浅草松竹館	葵館	三友館	神田日活館	富士館	武蔵野館	金春館	東洋キネマ	目黒キネマ	シネマパレス	芝園館	邦楽座
年代	1918-29	1916-29	1922-29	1919-29	1921-29	1924-29	1924-29	1921-29	1918-23	1922-29	1923-27	1924-29	1925-29	1927-29
週報数	394	291	96	177	114	124	144	264	82	65	73	139	209	78
演目数	404	254	48	193	40	164	79	347	111	109	89	166	358	54

とられたため、その現場となったのは主に洋画上映館であった。週報から1916～29年の各館でどのような楽団と楽長が活動したかについての情報を年代を追って整理した結果は、表２のようにまとめることができる。ここでは14館を、松竹系、日活系、武蔵野館、それ以外、の４つの系統に分けて考察する。

1-1. 松竹系

まず、表2の左側に松竹系としてまとめた帝国館、電気館、松竹館のうち、1920年以前に洋画館として興行していたのは帝国館と電気館で、1920年以前にはそれぞれ11～15名の規模で軍楽隊出身者を楽長として演奏していた。1920年11月に松竹キネマが立ち上げられると、旗揚げに山田耕筰を起用して邦画《島の女》に40人の大オーケストラで伴奏を付け、記念演奏を行っている[1]。以後、松竹管弦楽団という名称により、帝国館で島田晴誉を楽長として20名で演奏した。1922年1月には松竹館、1923年には電気館も松竹傘下となり、総楽長島田の下にそれぞれ軍楽隊出身者（黒田周造・高橋梅吉・今澤喬造・稲葉與四郎・鈴川家潤）を楽長として9～18名の楽団を擁した。この3館は浅草六区で隣接していたため楽士の交替・補充も容易であったようで、場合に応じて合同で40余名の演奏が行われた[2]。ただし、松竹館と電気館では1923年から松竹キネマ制作による邦画の上映館へと移行したため、洋楽の演奏記録は帝国館よりも格段に少ない。その後1929年には帝国館も邦画館となった。

1-2. 日活系

日活系として挙げた４館のうち、洋画館は赤坂の葵館のみで、1920年以前からアオイ・オーケストラとして４～９名の小規模編成で演奏が行われていた。1923年には日活直営となり、1925年には日活シンフォニーオーケストラとして軍楽隊出身の田中豊明の下に13名で演奏した記録が見られる。その後1926年には田中豊明が去り、名称は再びアオイ・オーケストラとなった。

1 「此の大管弦楽団は松竹キネマ合名社独特の誇でありまして、欧米楽団にも名声嘖々たる山田耕作氏が映画館向上運動の一方法として、進んで監督され楽長島田晴誉氏、加瀬順氏が指揮杖を揮ります。」と説明されている（京都明治座プログラム1920年12月4～8日　松竹大谷図書館所蔵）。

2 実際、『活動画報』7/6, 35-36には、電気館について「オーケストラとしては大部分が帝国館の連中が行って出張演奏をするのですから悪かろう筈がありません。」と報告されている。

表2　各館の楽長と楽団名・規模

	松竹系			日活系				武蔵野館	その他の洋画館					
	帝国館	電気館	松竹館	葵館	三友館	日活館	富士館（邦画）	武蔵野館	金春館	東洋キネマ	目黒キネマ	シネマパレス	芝園館	邦楽座
1916									fl vn vc pf					
1917									安藤含む5名					
1918				アオイ・オーケストラ										
1919	帝国館管弦団 ●小畑 ○小野寺 ⑪	電気館管弦楽部⑬ ○倉満		④					K.T.H.オーケストラ ⑩⑫ ★（波多野兄弟F/K）					
1920		⑮		⑨										
1921	20/11松竹キネマ山田40名を指揮								松竹系となる					
1922	松竹大管弦楽団 ⑳ ○島田							武蔵野管弦楽団 ○毛屋 ⑭		⑭ハタノ・オーケストラ ★波多野K	ハタノ・オーケストラ ★波多野K			
1923		河村	松竹キネマ管弦楽団 ○島田	山崎 ○吉田 ○松本 ○小澤	田野倉 ○小澤									
1924	㊵（合同）	松竹管弦楽団⑯ ○島田	⑨		○小澤 青木	日活管弦楽団 ○小澤 ○荻原 ⑬					⑪ ★波多野F			
1925		○黒田（総長：島田）	○高橋（総長：島田）	⑬日活シンフォニーオケ（SO）○田中 ○平田	○小澤 ⑬	日活SO ○田中 ○荻原	⑤	グリゴリエフ		⑱トオキネ・オーケストラ ★鈴木	ゴルゴタ管弦楽団 ハタノ・オーケストラ ★波多野F	オルケストル・ロココ ★前田 ⑨○毛屋		
1926	㉚		⑫ ○今澤 ○黒田 ○稲葉 ○鈴川	アオイ・オーケストラ ○吉田	松平武夫	日活管弦楽団	⑧				松竹大管弦楽団 ○沼田	山田 ★前田 ○毛屋 岩田 藤井	芝園オケ ○毛屋 ⑱海原	日露交驩演奏会
1927				小檜山								武蔵野第三管弦楽団 三昇	★前田 ⑱	日響定演開始→日響分裂
1928	帝国管弦楽団⑪ ○沼田	⑱		榊		日活和洋大管弦楽団⑳	○小澤 ⑲	ペトロフ［C.シャピロ］				オルケストル・ロココ 三昇 ★長谷川		日本交響楽協会 山田 ●平野 ㊲
1929	松竹大管弦楽団 ○島田													

⑩＝楽員10名（人数確認できたもの）　★=船の楽士出身者　○=海軍軍楽隊出身者　●=陸軍軍楽隊出身者　　網掛け部分＝邦画のみ上演

三友館では洋画と邦画の両方が上演され、1923年以降に洋楽の演奏記録があり、1925年5月には軍楽隊出身の小澤淡山指揮の下で13人の編成であったこと、東京音楽学校出身の松平信博が編曲に当たったことが確認できる。1925年10月には邦画館となり、1927年には東亜キネマ系の邦画館となった。神田日活館は1924年に開館され、以来13名の日活管弦楽団の演奏記録がある。その後日活シンフォニーオーケストラとして1926年には葵館から田中豊明を迎えたが、並行して邦画上映が増加した。1929年には、洋楽器と邦楽器の混成による20名の日活和洋大管弦楽団の演奏記録が見られる。これに対して邦画館の富士館では1925年以降５～８名の洋楽部の存在が認められるが、演奏実態については情報が少ない。1927年には三友館から小澤淡山（指揮）と松平信博（編曲）のコンビが移ってきて、19名まで編成が拡大された。日活系の4館には松竹系のような合同演奏の記録はない。これは、葵館は赤坂、三友館と富士館は浅草、日活館は神田と地理的に離れていたことにも起因すると考えられる。

1-3. 武蔵野館

武蔵野館は1920年に新宿に開館し、以来、武蔵野管弦楽団として14名程度の楽員を擁し、洋画の上映が続けられてきた。楽団の人員は時とともに増員されたらしく、1925年にはロシア人のミハイル・グリゴリエフを指揮者に迎えて楽団が二部に分かれ、1927年には第三部が設けられ、さらに1928年には同じくロシア人のアレクサンドル・ペトロフ［コンスタンティン・シャピロ］（徳川1957:209）を指揮者に迎えた。

1-4. その他の洋画館

その他の洋画館のうち、1920年以前に注目すべきは金春館である。1918～20年の間、波多野福太郎・鑅次郎の兄弟を中心とするK.T.H.オーケストラが10～12名の編成で演奏し、奥山貞吉作曲の金春マーチで人気を得た。1920年末に金春館が松竹キネマの傘下に入ると、波多野兄弟はそれぞれ別に東洋キネマ、目黒キネマなどで活動し、ハタノ・オーケストラの名称により10～14名程度の規模で演奏した。1924年に波多野鑅次郎が帝国ホテルのサロン・オーケストラの楽長となり、映画館での活動から引いたのち、日露交驩交響管弦楽演奏会（1925年4月）から日本交響楽協会定期演奏会の開始（1926年８月）に至る時期、すなわち日本における交響楽運動の高まりの時期が、洋画館の楽士にとっても大きな転換点となった。1925年に山田耕筰が推薦者となってシネマパレスで活動を始めたオルケストル・ロココのメンバー表には、注目すべきことに、創設されたばかりの日本交響楽協会のメンバー、前田璣や松原興輔の名前が見られる。またシネマパレスが出版した『映画音楽愚談雑誌 錯覚』には山田耕筰や近衛直麿が文章を寄稿し、日本交響楽協会の楽員募集広告が掲載されている点から見ても、シネマパレスはこの時期日本交響楽協会と結びつき、交響楽運動の拠点ともなっていたと考えられる。1925年9月に日本交響楽協会が第１回演奏会を開いたのち、1926年２月以降シネマパレスのメンバーは替わり、1927年10月以降は武蔵野館の第三管弦楽団が担当することとなった。こ

うして、1925年を境に映画館楽士の中から交響楽団員となる者が出現したわけだが、日本交響楽協会は1926年９月には早くも分裂し、近衛秀麿の下に新交響楽団が創設された。交響楽団に進んだ楽士たちはそれだけでは自立し得ず、新交響楽団員が芝園館で、日本交響楽協会員は邦楽座で映画館楽士としての演奏を続けた。山田耕筰は、日響分裂前に前田璣が芝園館での演奏許可を請うた際には映画館での「内職」に反対した（山田1996:5）が、分裂後は日本交響楽協会として自らも邦楽座に出演し、30人以上の大編成による演奏を謳い文句とした（斎藤2018:22-23）。

２．楽士と所属館

週報および映画雑誌・映画年鑑より、対象時期に14の映画館で活動した楽士の氏名を275名確認することができた（表３）。表３では判明している限りの各人の履歴を、左から右に年代順となるように書き入れてある。以下に、この表から読み取れる特徴を、楽士の所属館により４つのグループに分けて説明する。

表3　映画館楽士の履歴と所属

通番	氏名	生年	履歴１	履歴２	履歴３	履歴４	履歴５	履歴６	履歴７
松竹系									
1	赤井信久				1918帝国館	1921-22船[tp]			
2	浅野正任				1918電気館				
3	安藤喜代治		1910海軍				1926松竹館		
4	伊神秀雄／秀男				1918,20,23 電気館		1924松竹館		
5	石井尚徳		1898海軍				1926松竹館	1928電気館	
6	石原					1923電気館 vn			
7	稲浪菊次郎		1912海軍 euph				1926松竹館	1928電気館	
8	稲葉與次郎／與四郎		1908海軍			1921-23 帝国館vn	1924,27 松竹館c		
9	猪飼英一					1923-24 松竹館			
10	猪俣英麿				1918-20 船 tp	1921帝国館			
11	今澤喬造／恭造		1910 海軍 cor			1921-23 帝国館cb	1926 松竹館c		
12	上田耕夢					1920電気館			
13	上田力蔵				1918電気館				
14	遠藤三郎		1906 海軍 cornet		1918-20 帝国館c				
15	大島久太郎					1923帝国館cl			
16	大林					1923 電気館drum			

17	大村秀峰							1928電気館	
18	岡村郷吉 fl	1895	1913陸軍 fl			1923電気館 fl	1924三友館	1927富士館	
19	岡安穂積							1928電気館	
20	小野寺秋濤		小野寺吉四郎 1906海軍 tb		1918帝国館 c				
21	小畑錦浪 pf	1887	1905陸軍		1918帝国館 c	1923電気館 c	1924 日本橋松竹館		
22	加瀬順		加瀬順一郎 1903 海軍 euph		1920 松竹キネマ c				
23	加藤書人					1921-22帝国館			
24	金井亀吉					1923松竹館			
25	鎌田堅治 org					1923帝国館			
26	萱間秀彦 vn	1908		東音選科			1924 深川辰巳劇場	1928電気館	
27	河村					1923電気館 c			
28	熊膳常太郎／ 富雄 cl	1890			1918,20 電気館	1924 深川松竹館			
29	倉満信政		1872-95 海軍？		1918-20,22 電気館 c				
30	黒田周造		1910海軍 ob			1921-22 帝国館	1923,26 松竹館 c	1924-28 電気館 c	1929帝国館
31	小高					1923電気館 cb			
32	此木耕一					1920,23 電気館 vn			
33	此木英雄						1924松竹館		
34	小林武彦		1911-13帝劇 vc	1913-22船 vc				1927-28帝国館	1929船
35	小林徳治					1921-22帝国館			
36	近藤正							1929電気館	
37	阪井／ 坂井秀吉					1921-23 帝国館 drum	1926松竹館		
38	坂下松太郎／ 耕楽				1918,20電気館	1923 電気館 vn		1927富士館	
39	佐藤守良							1928電気館	
40	澤井操一				1918-20船 cl	1922帝国館			
41	設楽菅家				1918帝国館				
42	柴政三郎		1908海軍 fl 別名柴政護				1926松竹館		
43	島田晴誉	1882	1898-1916海軍 島田福次郎 cornet			1921-27,29 帝国館 c	1922-28 松竹館 c	1923-28 電気館 c	
44	島田清三郎		1911海軍 fl			1923帝国館 fl			
45	島本正路					1923帝国館 vc			
46	菅井／ 須貝栄蔵				1918,23 電気館 vn		1924 日活館 vn	1927船	
47	杉本忠					1921-22帝国館			
48	杉山元次				1918帝国館	1923電気館 cl			
49	鈴川家潤		1906海軍 別名 鈴川美臣 cl			1921-23 帝国館 va		1927-28 松竹館 c	

50	鈴木清				1920-22船	1921帝国館			
51	鈴木善五郎				1920船		1926松竹館		
52	関沢清次郎					1921帝国館	1923松竹館		
53	千振勘二				1918帝国館		1926富士館		
54	平俊吾							1928電気館	
55	高田静香							1928電気館	
56	高橋梅吉		1906-21 海軍hr		1918,21,23帝 国館vn		1925松竹館c	1927-28 帝国館	
57	高橋常吉		1910海軍			1923帝国館cl			
58	高橋義太郎					1923松竹館			
59	高久助次郎／ 耕南				1918, 20電気館				
60	武井齋				1920電気館				
61	竹本豊					1922帝国館			
62	千葉勇記				1918帝国館				
63	寺井					1923電気館tp			
64	内藤政太郎					1922-23帝 国 館vn	1924,26 松竹館		
65	長岡徳三郎				1919,21船cl	1922帝国館	1923松竹館	1925船	
66	中川清明				1919-20船[vc]	1921帝国館	1924松竹館		
67	中村耕菊				1920電気館				
68	中村永治					1921-23 帝国館vc			
69	西村宰輔				1920電気館				1922船
70	野中茂夫						1926松竹館		
71	長谷川敬三 （造）						1923-24 松竹館		
72	長谷川善士				1918帝国館				
73	林一夫					1923帝国館vn			
74	原田五郎vc	1901	三越		1920船[vc]	1922帝国館	1924三友館		1925日露tb
75	原田録一			六崎tp		1922-23 帝国館tp			
76	日鞄／ 氷鞄 耕哉		1907-13陸軍 別名杉浦			1920,23 電気館vc			
77	藤井勇熊		1910海軍 fg			1921-23 帝国館vn	1926松竹館		
78	藤田精三					1921帝国館			
79	藤田政次					1922帝国館			
80	本田義恵					1921-23 帝国館vn	1926松竹館	1928電気館	
81	増井芳太郎／ 耕波				1918,20,23 電気館tb				
82	丸山彌吉／ 笑華				1918,20 電気館				
83	保田正治		1911海軍 fl		1918電気館				
84	梁瀬武之					1923松竹館			
85	山北文雄／ 二三雄／ 耕洋org				1918,20,23 電気館org		1926松竹館		

86	山口利（治）三郎					1922帝国館	1926松竹館	1928電気館	
87	山越忍也				1918帝国館				
88	山田由次郎					1922船[vn]	1926松竹館		
89	山本忠				1921帝国館	1923-24松竹館		1927富士館	
90	山本信太郎／新太郎		1912海軍 tb					1928電気館	
91	湯川末雄		1911海軍 tb			1923帝国館tb			
92	渡辺八郎				1918電気館		[1924海 軍 cor はおそらく別人]		
93	渡邊芦耕				1920電気館				
94	渡辺					1923電気館va			
95	渡辺大三郎				1918帝国館	1923松竹館			
日活系									
96	青木亀次郎pf	1906					1924三友館		
97	青木策雄tp	1893				1923 キネマ倶楽部	1924,25 三友館c	1924日活館	
98	天野不二雄					1923船pf	1924日活館pf	1925-26 東音選科pf	
99	石井金次郎 drum	1898					1924三友館	1927富士館	
100	石川順之助cl	1899					1924三友館		
101	岩城三郎pf	1900					1924日活館		
102	上野常雄						1925富士館		
103	臼倉吉之介							1927富士館	
104	内田政夫				1918葵館	1918,19 船vn vc			
105	卯月啓五郎 cb	1902			1918海軍fg		1924,29 日活館fl		
106	梅家市三郎							1929日活館	
107	梅家平之助							1927富士館	
108	江口五郎		江口五郎作 1913-23陸軍				1925葵館c		
109	大塚泰三vn	1891		大塚泰正 1915船[pf]	大日本		1924 日活館drum		
110	大西重雄							1929日活館	
111	岡田利典vn	1904				1924船	1924三友館vn		
112	小川淳次郎						1926富士館		
113	荻原辰也						1925-29 日活館c		
114	荻原弥助vc	1896	1912海軍 cl			1923 キネマ倶楽部	1924-25 日活館vn		
115	奥田利典vn						1924日活館		
116	小澤濱蔵／淡山		1887-1920海軍 fl, cl			1923-27 三友館c	1923 キネマ倶楽部	1924 日活館c 葵館c	1927-28 富士館c
117	小野沢守治				1918富士館				
118	勝部平三郎							1927富士館	
119	勝又盛衛 cb, tb	1893	1912-24陸軍				1924日活館		1926-46 大阪市音楽隊
120	金城光次／光治						1925-26 富士館		

121	木村いし(いく)							1927富士館	
122	熊谷真一/ 新一tb	1895	1912海 軍cor				1924,29 日活館		
123	栗山哲四郎				1918富士館				
124	河野通三 cb	1896			1918帝国館		1924日本館		
125	小西金次郎						1925富士館		
126	小林栄吉vn	1888					1924日活館		
127	小林太樹							1927富士館	
128	小林通久		1912海軍 cl					1929日活館	
129	小檜山次郎						1926-27葵館c		
130	斉藤定人			1917海軍fg				1929日活館	
131	榊昌平							1928葵館c	
132	桜井八百壽				1918富士館				
133	篠田謹治				1918富士館	1921-23 帝国館pf			
134	杉浦祐治cl	1890	1907-13陸軍				1924,29 日活館cl		
135	鈴木繁夫							1927富士館	
136	鈴木慶子							1929日活館	
137	高尾/ 高屋 蔀vn	1902					1924-25 日活館vn		
138	高岸博一							1929日活館	
139	竹下琴次						1925富士館		
140	建部光興 tb	1905					1924三友館		
141	田中豊明	1880	1895-98 海軍				1924-29 日活館c	1925-26 葵館c	
142	玉置勝治				1918葵館				
143	丹野志満治					1921海軍cl		1927富士館	
144	千本松昇							1929日活館	
145	十津川千代							1927富士館	
146	鳥海丑五郎vn	1893		六崎vn			1924日活館		
147	鳥海信清						1925,27-29 日活館		
148	内藤徳松						1926富士館		
149	新野輝雄	1904	浅草千振系				1925,28船[cl]	1929日活館	
150	二階堂健介							1927富士館	
151	西山薫tp	1897	1913海軍				1924,27-29 日活館tp		
152	捻木健一						1925-26富士館		
153	林昇vc pf	1904	東洋				1924日活館vc		
154	平田茂				1919-22海軍	1923 キネマ倶楽部fl	1925葵館		
155	平山武雄/ 紫峯		1907海軍 cl 別名雅章					1927-28 日活館	
156	藤本健之丞							1928船	1929日活館
157	船橋孝昌 vn	1897	1911 松坂屋cl,vn		船橋修一郎 1918-20 船 [cl,vn] 大日本		1924三友館		1925日露vn
158	本堂藤蔵						1924日活館vn		

159	松平信博	1889	1914東音	1914-20船pf			1925-27 三友館a	1928 富士館a	
160	松平武夫				大日本	1923船[vc]		1927三友館c	
161	松村クニ							1929日活館	
162	松本左喜夫						1926富士館		
163	松本六郎		1907 海軍 T.Hr				1924-25 葵館c		
164	三浦儀太郎		1911海軍 cl				1924日活館tb		
165	見竹正義							1927富士館	
166	峯岸キエ							1929日活館	
167	宮野顕		1913海軍					1927富士館	
168	宮本須賀雄							1927富士館	
169	武藤伊三雄						1924日活館vn		
170	八木重太郎 vn	1894	東洋				1924三友館	1927富士館	
171	山崎貴崇				1918葵館				
172	山崎貫一pf	1899		東洋		1923葵館c			
173	横井太十郎cb	1903		松坂屋		1924三友館			
174	横山国太郎		1890海軍	1912帝劇fl	金龍館fl		1926富士館		
175	吉井實vn	1907		東洋		1924日活館			
176	吉田空賢		1911海軍 別名大野空 賢 Eb cl			1923 キネマ倶楽部	1924-26 葵館c		
177	吉成春三郎						1926富士館		
178	吉村松太郎vn	1892			1918富士館		1924三友館		
179	吉本幸三郎pf	1904					1924三友館		
180	渡辺健次郎							1929日活館	
武蔵野館									
181	飯田信夫							1929 武蔵野館	
182	今村陸郎pf	1895	東洋		1916-24船pf		1924 武蔵野館pf	1929船pf	
183	上野淳 vn,tb	1894	1912-20 陸軍tb				1924 武 蔵 野 館vn tb		
184	宇賀神満雄/ 光男vn	1896	東洋		1920 船 cl		1924 武蔵野館vn		
185	浮田重雄vn	1898		三越			1924 武蔵野館vn	1928電気館	1929日活館
186	大津栄						1923-24 武蔵野館tb		
187	荻野専次va	1900					1924 武蔵野館va	1927-28船	
188	貫洞喜代治 pf	1901			1918東洋	1919-22船pf	1923-29武蔵野 館pf drum		
189	熊谷栄松 tb	1900					1924 武蔵野館tb		
190	グリゴリエフ・ ミハイルvc	1899					1925-28 武蔵野館c		
191	志賀進vn	1904					1924 武蔵野館vn	1926芝園館	
192	清水(抱雪)						1923-24 武蔵野館pf		

193	杉田						1923 武蔵野館vn		
194	田原						1923 武蔵野館va		
195	千葉盛人fl	1893	1911陸軍 別名千葉成人				1924 武蔵野館fl		
196	中野定吉/ 定臣		1911 海軍 bn, cl				1923-24 武蔵野館vn		
197	西澤久男vc	1899				西沢郡司 1923船 ![vc]	1924 武蔵野館vc		
198	長谷川長之助 /秋甫	1886		1914-21船tp			1922-28 武蔵野館tp,c	1929 シネマパレスc	
199	原						1923 武蔵野館tb		
200	氷本雄二						1924 武蔵野館		
201	藤原 花山						1923-24 武蔵野館fl		
202	ペトロフ [シャピロ]						1929 武蔵野館		
203	町澤栄治郎	1898					1924 武蔵野館vc		
204	水本						1923 武蔵野館vc		
205	宮下						1923 武蔵野館cl		
206	安河内						1923 武蔵野館vn		
207	横尾秀		横尾大秀 1910海軍 hr				1924 武蔵野館		
208	吉田清(太郎) cb	1885					1923-24 武蔵野館cb		
その他の映画館									
209	相澤			相沢操一 大日本tb vc	1917 金春館vc	相沢斐雄 1918-19船vc	相沢斐雄 1923 東洋キネマtb		
210	浅井		浅井健三郎 1913-16 船vn,tp	浅井健三郎 1915東洋vn	1918金春館				
211	阿部常夫						1926芝園館		
212	阿部万次郎		1909三越			1922-23 東洋キネマpf	1924 帝国ホテルpf	1925 シネマパレスpf	1925日露ob 1926日響ob 1927新響ob
213	阿部實						1926芝園館		
214	安藤				1917 金春館vn				安藤福太郎 1925日露vn 1926日響vn
215	石川利三郎				1920金春館cl				
216	井田一郎	1894	1909-19 三越vn hr	1919-21 船vn	1920花月園	1922宝塚 松竹楽劇部vn		1928電気館 ジャズ部	
217	伊藤昇	1903			1920 海軍 cor	1923 キネマ倶楽部	1926芝園館		1926日響tb 1927新響tb
218	岩田啓						1926 シネマパレスc	1927富士館	
219	上宮勝				1919-21 船 tp	1923日黒キネマ tb 1924東洋キネマtb	1925 シネマパレス org,sax	1926-29 芝園館	1925日露tb 1926日響hr 1927新響hr
220	内田正雄						1924-26 赤坂帝国館	1926芝園館	

221	梅原英作							1927 目黒キネマc	
222	太田辰夫／ 辰雄		六崎cb			1923 目黒キネマcb			
223	大田						1925 シネマパレスpf		
224	大津三郎	1892	1910 海軍B.tb			1922 東洋キネマtb	1923 目黒キネマ vc,c		1925 日露drum,tb 1926日響tb 1927新響cb,tb
225	大村卯七					1923 電気館vc	1925シネマパレスvc,cb		1926日響vc 1927新響vc
226	岡村雅雄				1921 花月園fl		1924 目黒キネマfl	1929邦楽座	1925日露fl 1926日響fl
227	岡本末蔵				大日本cl		1922-24 東洋キネマcl		1926日響cl 1927新響cl
228	奥山貞吉	1887	1911東洋 1912帝劇	1914-18 船cl pf	1918金春館 大日本cl	1922金龍館	1924 帝国ホテルpf		
229	海原英作						1926芝園館	1928電気館	
230	加藤福太郎			1917-18船pf	加藤某1920 金 春 館 pf/ organ	1921花月園pf		1927芝園館	1928船pf
231	加藤操cl	1891		1915-19船cl	大日本cl	1923 目黒キネマcl	1924 武蔵野館cl	1926-29船cl	
232	川口					1923 目黒キネマva			
233	菊地					1923 東洋キネマvn			
234	木島勇吉				1920金春館tb				
235	北川嘉納		1907海軍		1921花月園	1922船vc	1923 東洋キネマvc		1925日露vc 1926日響tb 1927新響tb
236	木村乙弥				1920金春館cb				1924日露cb
237	木村京二	1899				1924 京橋日活館	1926-27 シネマパレス	1928邦楽座	
238	黒沢[健雄]		黒沢健二 1920三越fg			1923 東洋キネマpf	1924-29 船[cl/pf]		1926日響fg 1927新響fg
239	毛屋平吉		1910海軍 cl			1922-24 武蔵野館c	1925芝園館c	1926 シネマパレスc	
240	小長井					1923 目黒キネマhr			
241	駒形くにたか		東洋？		1919-22 船[tp]	駒形国二1923 東 洋 キ ネ マ drum	1925 シネマパレスa	1927船[tp]	
242	佐伯憲二					1923 目黒キネマhr			1925日露tp 1926日響tp 1927新響tp
243	佐藤義雄	1894	佐藤義夫 1912-18陸軍				1926芝園館		
244	三界稔							1927-29 シネマパレスc	
245	篠原茂男		大日本tp	1917 金春館tp	1919-21船tp	1922帝国館	1923 東洋キネマtp		
246	篠原正雄	1894	1912東洋	1913-14船cl,pf 大日本pf	1916ローシー オペラc	1919 日本館c	1922金龍館	1925 目黒キネマc	1928東京松 竹楽劇部
247	鈴木正一			1915-21 船vn	大日本vn	1924 東洋キネマc	1925 目黒キネマc		
248	高木五郎					高木　1923 目黒キネマvn	1925シネマパレスvn	1926船 vn	

249	高階哲夫	1896			1921東音vn			1927-28 邦楽座c	
250	田中					1923 目黒キネマpf			
251	田辺千次		1909三越 cl,vn			1923 東洋キネマvn			1925日露vn 1926日響vn 1927新響vn
252	中川三郎				1920金春館vc				
253	中村鉱次郎		1911 松坂屋tp,tb	1917-21 船tp,vn	1921 花月園tp	中村　1923 目黒キネマvn	1924 武蔵野館	1924 帝国ホテル vn,tp	1925日露va 1926日響va 1927新響va
254	仁木他喜雄 drum	1901	六崎 drum	大日本 drum	1921花月園 drum	1922金龍館 drum	1924 目黒キネマ drum		1925日露perc 1926日響perc 1927新響perc
255	沼田北方		1900海軍 沼田政治郎cl				1926 目黒キネマc	1927-28 帝国館c	
256	波多野鎌次郎	1893	東洋？	1913-18 船tp,vn	1918金春館 大日本vn	1922-23 東洋キネマ	1923 目黒キネマc	1924 帝国ホテルvn	1925日露vn
257	波多野福太郎	1890	1911東洋	1912-18 船tp,vn	1918金春館c 大日本tp	1921 花月園c	1924-25 目黒キネマc	1926-28 芝園館(c)	1927新響vn
258	林[信透]					1923 東洋キネマcb			1925日露cb
259	久岡幸一郎	1903	東洋				1925 シネマパレスvn		1926日響vn 1927新響vn
260	平野主水		1895-1927 陸軍					1927-28 邦楽座c	
261	福田宗吉		1913-14 東音選科vn	1917-22 船vn	1920 金春館vn	浅草千代田館c			1926日響vn 1927新響vn
262	藤井潜 pf	1902	東洋			1924 深川辰巳劇場	1925帝国館pf	1926-27 シネマパレス	
263	前田璣	1899	1917東洋	1918船	1922-24 東洋キネマvn	1924武蔵野館 1924目黒キネマc	1925シネマパレスvn	1926-29 芝園館c	1925日露vn 1926日響vn 1927新響vn
264	松原與輔		1914東洋	1917-19 東京選科	1919-22船	1924 東洋キネマvc	1925 シネマパレスvc		1925日露vc 1926日響vc
265	宮北順吉		宮北甚吉1906 海軍Bass			1923金春館c			
266	宮田清造		1909三越fl		1917-21船fl	1923 東洋キネマfl	1924 帝国ホテルfl		1925日露fl 1926日響fl 1927新響fl
267	無井正路						1926芝園館		
268	村田				1917 金春館pf				村田みゆき 1918-21船pf
269	山田耕筰	1886			1920 松竹キネマ		1925,27 シネマパレス	1928-29 邦楽座c	1925日露c 1926日響c
270	山本清三 [清一]			1918-27船pf	1919東洋pf	1923 目黒キネマpf			
271	横枕文四郎		1896海軍T.H.				1925芝園館c		
272	吉田民雄			1912 帝劇tp,hr		1923-24 東洋キネマhr	吉田　1924 目黒キネマtb		1925日露hr
273	吉田啓平			1918-21船vn			1926芝園館vn		
274	和田肇	1908				1924東洋	1924 帝国ホテルpf	1927-29 芝園館	
275	渡辺				1917 金春館vn	1923 東洋キネマvc			

c＝指揮者　東洋＝東洋音楽学校　東音＝東京音楽学校　海軍＝海軍軍楽隊　陸軍＝陸軍軍楽隊
三越／松阪屋＝三越／松坂屋少年音楽隊　船＝北太平洋航路の船の楽団　大日本＝大日本中央音楽団（大森1986:101-103）
日露＝日露交驩交響管弦楽演奏会　日響＝日本交響楽協会　新響＝新交響楽団

2-1. 松竹系

松竹系の帝国館・電気館・松竹館に所属した楽士は、合計95名（通番1～95）確認できた。その特徴はまず軍楽隊の出身者が多いことで、楽長を含め、23名に軍楽隊の所属記録が確認できた。1923年1月14日の松竹館週報には「当館の大管弦楽団廿一名は専属松竹洋楽部長島田楽長以下悉く海軍軍楽隊出身の粒揃です。これ程の大管弦楽団は東洋の劇場常設館を通じて他にはありません。」とある。実際に全員が軍楽隊出身であったかどうかは確認できないが、少なくとも軍楽隊出身者を揃えることにより演奏レベルを維持するという意識があったことが伺える。これに対して、北太平洋航路の船の楽団（武石2018参照）での活動記録があるのは12名で、そのうち6名は船から映画館へ、4名は映画館から船へ、そして2名は映画館での活動の前後に船の楽団に所属していた。また、多くの楽士が系列の複数の映画館に所属していたことも特徴であり、95名のうち29名、すなわち30%がこれにあたる。これは上述のように、この3館が浅草で隣接していたことと関係すると考えられる。

2-2. 日活系

日活系の葵館・三友館・日活館・富士館に所属した楽士は、合計85名(通番96～180）確認できた。ここでも軍楽隊の出身者が多く、楽長を含め19名に軍楽隊の所属記録が確認できた。船の楽団の所属記録があるのは9名であるが、そのうち8名は船の楽士を経験したのちに映画館楽士となっている。松竹系と比較すると、複数館に所属記録のある楽士の割合は少なく、84名のうち12名、すなわち14%である。

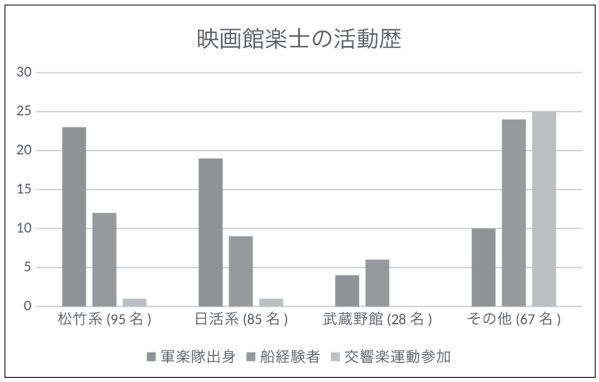
2-3. 武蔵野館

武蔵野館に所属した楽士は合計28名（通番181～208）確認できた。ここでは軍楽隊出身者は4名と少ない。船の楽士経験者6名のうち5名は、船の楽士を経験してから映画館楽士となっており、特に長谷川長之助（秋甫）は船の乗船経験が26回（1914～21年）と多く（武石2018: 8）、1920年9月～1921年2月に3回、鹿島丸の楽士として一緒に乗り組んでいた貫洞喜代治と共に、武蔵野館で長期間にわたり中心的な役割を果たした。武蔵野館楽士のうち、他の映画館での活動が確認できたのは3名（1%）ときわめて少ない。

2-4. その他の洋画館

上記3つの系列以外の映画館で活動した楽士は、合計67名（通番209～275）確認できた。このうち軍楽隊出身者は9名であるのに対して船の楽士経験者は24名に上り、その多くは映画館より前に船の楽士を務めている。1-4で名を挙げた波多野兄弟、前田璣、松原興輔らは、いずれも東洋音楽学校から船の楽士を経験して映画館楽士となった。また67名のうち29名（43%）は複数の映画館での活動記録があり、また帝国ホテルや劇場等での活動記録も含めると37名（55%）が、それぞれ多様に場所を変えながら活動してきたことがわかる。最も注目すべきは、1925年の日露

交驩交響管弦楽演奏会、1926年日本交響楽協会、そして1927年の新交響楽団にメンバーとして加わった人物が25名見られる点である。松竹系と日活系では交響楽運動に参画した楽士はそれぞれ1名に過ぎず、いずれも日露交驩交響管弦楽演奏会への参加のみで、交響楽団には入団しなかったという点で大きな違いが見られる。



以上のような集団属性の違いは、左のグラフにも明確に表れている。

3．演奏曲目

3-1. 伴奏曲

洋画の無声映画では、フィルムと共に映画会社から伴奏楽曲のキューシート（指示書）が送られてくる。しかし実際には指示された楽曲の楽譜がすべては揃えられないため、手元に楽譜のある別の楽曲で代用したり、映画伴奏用の短い楽曲集から曲を選んで演奏したりした。楽長は事前にフィルムの全体を見て、どの音楽素材をどのタイミングで演奏するかを決め、それを練習して上映に備えた。実際に用いた伴奏曲の記録は、表4に示す4例のみ確認できた。

表4　伴奏曲の実践例

館名	楽長	挿入曲数	楽曲数	出典	
金春館	波多野福太郎	33曲	32曲	1920/05/01	キネマ旬報29
東洋キネマ	波多野鑅次郎	20曲	19曲	1923/06/01	活動画報7/6
武蔵野館	毛屋平吉	26曲	20曲	1923/07/01	活動画報7/7
電気館	小畑錦浪	42曲	17曲	1923/08/01	活動画報7/8

このうち波多野福太郎が率いる金春館は、年代が早いにもかかわらず、映画1本の伴奏に計32曲もの楽曲を演奏している点で際立っている。これに対して電気館では、似た情調のシーンでは同じ楽曲を用いたため、伴奏挿入数に比べて楽曲数が少ない。

邦画においてはキューシートの用意がなかったため、邦楽器で伴奏を入れたり、西洋の楽曲を使ったりという試行錯誤を重ねた末、日活は1924年に作曲部を置き、伴奏曲の編・作曲を松平信博にゆだねた。邦画への伴奏曲について、松平自身、次のように語っている。「時代劇には、日本固有の楽器を使用しないと、映画がシックリ落付いてこない点があるから厄介で始末に了えない。だから、私はこの時代劇伴奏に就いてつねに日本楽器を骨子として、洋楽器を肉として編成すると最も効果多きものとして試みている。」（『国際映画新聞』39,16-18）これにつ

いては田中豊明も、「時代劇に洋楽伴奏を嫌う人もいるが、感情的場面は洋楽の方が表現しやすい。邦楽では歌詞がないと感情が伝わらないため。但し洋楽が多すぎてもよくないので、三味線音楽を洋楽器で多少の和声を加えて演奏している。漸次洋楽化が期待される。」という意見を述べている（『映画と演芸』3/12,31）。すなわち邦画の伴奏では、西洋の楽曲を援用しながらも、加えて邦楽器をまじえた和洋合奏の伴奏形態を試み、さらには独自の編曲や作曲を試みる方向へと進んだ（紙屋他2015, 柴田2016, 柴田2017参照）。

3-2. 休憩奏楽

休憩奏楽は、映画と映画の間に既存の楽曲全体を聞かせるものであり、西洋の楽曲に人々がなじむ上で大きな役割を果たした。通常映画と映画の間に1曲か2曲が演奏されるが、映画館によっては冒頭にマーチを奏する館もあった。

前掲の表1にあるとおり、週報で演奏演目が300以上確認できたのは、帝国館（404）、芝園館（358）、武蔵野館（347）である。1週間同じ曲を演奏すると、次の週は異なる楽曲が選ばれるため、週報に記載される演奏曲目は当然多岐に渡っている。その中で、特に同じ曲を繰り返し演奏する傾向の強い帝国館での演奏曲目に着目し、他の2館、および波多野兄弟の演奏曲目（金春館・東洋キネマ・目黒キネマ）と比較すると、表5のような結果となる。

表5に挙げた楽曲は、帝国館で演奏頻度の高かった19曲である。19曲中18曲は軍楽隊または浅草オペラで演奏された楽曲で、これは、帝国館が楽長以下軍楽隊出身者が多かったこと、さらに帝国館がまさに浅草オペラのご当地にあったことに起因すると思われる。島田晴誉自身、「特に浅草に於ては興行政策の上からも広く耳に慣れたものの方が都合が宜い」（『活動画報』7/6, 34）、「休憩奏楽はカルメンやドナウ河の漣のような定番曲に新曲を入れていく」（『活動画報』7/7, 67）と浅草の客筋に合わせた選曲方針を語っている。オペラの抜粋や序曲が多いが、今日のように全曲スコアを用いて演奏するのではなく、当時アメリカから輸入されていたオペラや序曲の曲集（参考文献参照）を用いての演奏であった。唯一、軍楽隊でも浅草オペラでも演奏記録の無いビッゲ作曲『秋の女王　序曲』も、序曲集 *Album of Overtures* に所収されている楽曲である。1918年8月17日の週報に発表された人気投票では『ダブリン湾の歌』『カルメン』『ファウスト』『マリタナ』『ボヘミアの少女』『ウィリアム・テル』『美しく青きドナウ』が高得票を得ており、表5の19曲と重なるところが多い。今日、これらの楽曲がクラシック音楽を代表する作品とは言い難いが、大正～昭和初期においてはこうした楽曲が洋楽を代表する存在であった。そのことは、この19曲がその後セノオ楽譜やシンフォニー楽譜、戦後の全音ピアノピースにまで所収されているという事実に示されている。

これに対して武蔵野館をはじめとする他館では、帝国館のような演奏楽曲の偏りは見られない。演奏頻度の点では目立たないが、武蔵野館では楽長グリゴリエフの下でベートーヴェンの『エグモント序曲』、ハイドンの交響曲の緩徐楽章やフィナーレ、ドヴォルザークの小曲、モーツァルトの『魔笛』序曲等を取り上げている点が特徴である。また、グリゴリエフとシャピロという

表5　演奏頻度の高い曲(帝国館を中心とする比較)

	作曲家	作品	他の演奏状況		映画館での演奏回数				出版状況				
			軍楽隊 1884-1929	帝劇・浅草オペラ 1913-1925	帝国館 1918-29	武蔵野館 1921-29	ハタノ 1918-24	芝園館 1925-29	Album of overtures 1913	Grand opera album 1915	セノオ楽譜 1910-1929	シンフォニー楽譜 ヴァイオリン・マンドリン 1930?	全音ピアノピース 1964
1	ビゼー	カルメン	◎	◎	14	2	4	4		○	28,90,150-155	8	55, 141, 179
2	マーフィー	ダブリン湾の歌	○	○	9						7		
3	オッフェンバック	地獄のオルフェ(天国と地獄)	○	○	8	5	1		○		171-173	12	91
4	ロッシーニ	ウィリアム・テル序曲	◎		8	5	2		○		302	44	
5	フロトー	マルタ	◎	○	7	2	2					43	75
6	グノー	ファウスト	◎	◎	7	3	1	1		○	143-149,398	26	11
7	ヴェルディ	アイーダ	◎	○	7	4	1			○	397	18	144
8	ミヒャエリス	森の鍛冶屋	○		6	5					379	36	49
9	スッペ	寄宿舎　抜粋	○		6								
10	ビッゲ	秋の女王　序曲			5				○				
11	レハール	メリー・ウィドー	◎	△	5	3	1		○		32		205
12	ルボミルスキー	オリエンタル・ダンス	△		5	4		1				1	
13	ノートン	シュー、シン、チョー	○		5								
14	スッペ	詩人と農夫　序曲	○		5	4			○			51	54
15	オードラン	マスコット	◎	○	4		2				20		
16	バルフ	ボヘミアの少女	◎	△	4	3			○		219	92	
17	ボイエルデュー	バグダッドの太守序曲	○		4	2	1	1	○			9	
18	ロッシーニ	アルジェのイタリア女　序曲	○		4		1		○				
19	ヴェルディ	椿姫	◎	○	4	2		3		○	53	66	

軍楽隊は谷村2010、オペラ関係は増井2003、楽譜については斎藤2002とシンフォニー楽譜[1930?]を参考にした

ロシア人の楽長を擁していたことを反映して、チャイコフスキー『スラヴ行進曲』の演奏記録も見られる。以上のような楽曲は、軍楽隊の演奏ではすでに早くから取り上げられていたが、映画館では珍しい曲目であった。

次に、波多野兄弟の選曲は、さらに帝国館の傾向からの乖離を示している。1920年末に金春館を去る際に、「お別れの記念として、嘗つて当館にて奏し、而かも我国に於ては嘗つて見ざる第一流の芸術を示したる提琴名手[ミシェル・]ピアストロ氏より賞讃を博したる[リストの]『第二洪牙利狂想曲』を演奏する」(1920年12月18日週報)という記述に見られるように、芸術的指向が強い。モーツァルトの『フィガロの結婚』序曲(1922年6月2日東洋キネマ)やベートーヴェンの『エグモント序曲』(1924年6月20日目黒キネマ)は、映画館の中では最も早い演奏記録である。波多野兄弟は金春館以来、冒頭にマーチを演奏するスタイルを取ることが多かった

ため、軍楽隊で演奏されたスーザのマーチの他、軍楽隊では演奏記録のない［ロバート・ブラウン・］ホールのマーチもいくつか演奏した。波多野鐐次郎資料には、参考文献表に記したような人気曲集の楽譜やスーザのマーチ集等を所蔵していたことが記録されている。

帝国館において松竹系列合同の40名のオーケストラ規模が強調されていた一方で、14人程度の楽員による目黒キネマ（波多野鐐次郎楽長）と武蔵野館では、映画上映とは別に音楽のみのコンサートも催されていた。表6はそのプログラムである。

表6　映画館の楽団によるコンサート・プログラム

1923/6/17目黒キネマ　波多野鐐次郎指揮		1925/7/1 武蔵野館　グリゴリエフ指揮	
ヴェルディ	運命の力　序曲	ワーグナー	タンホイザー行進曲
サラサーテ	ホータ・ナヴァラ	ドヴォルザーク	『新世界』よりラルゴ
ドヴォルザーク	ユーモレスク	スキルトン	インド舞曲二種 鹿の舞踊・戦闘の乱舞
リスト	ハンガリー狂詩曲第2番	チャイコフスキー／トバニ編曲	アンダンテ・カンタービレ
		エロルド	ザンパ　序曲
		トバニ	オペラの響

このうち、目黒キネマのコンサートでは、ヴァイオリンの波多野鐐次郎が活躍できる楽曲が選曲されている。またいずれのプログラムにおいても、軍楽隊や一般大学のオーケストラの演奏曲目で多く見られる交響曲は含まず、映画館の客層に合わせて、親しみやすく演奏時間が長すぎない楽曲が組み合わされているという点が特徴である。

他方、新交響楽団の団員が演奏する1926～29年の芝園館においては、『カルメン』を除くと、帝国館のような選曲傾向は全く見られない。交響楽団員としての本業で交響曲を演奏しているため、芝園館での演奏曲目の中で、交響曲はシューベルトの未完成交響曲第1楽章のみである。その他に、チャイコフスキーの『ユーモレスク』、『くるみ割り人形組曲』、『エフゲニー・オネーギン』よりポロネーズ等が演奏されていることが、他館とは異なる特徴である。

ここまで、西洋音楽の休憩奏楽について述べてきたが、邦画の上映が増えるとともに、休憩奏楽を別の物に置き換えるという傾向が見られるようになった。1926年には松竹館で「独創和洋混成楽」が開始され、1927年には電気館で日本の旋律を中心に洋楽器と邦楽器の混成で奏する「和洋大合奏」が開始されたのである。日活系では1927年から田中豊明が自ら編曲した「意想曲」や「幻想曲」を演奏した。これに伴い、これら3館ではいずれも、和洋折衷的な演奏スタイルが西洋の楽曲の演奏に置き換わることとなった。また、西洋音楽を演奏し続けてきた洋画館においても1929年には武蔵野館でヴォードヴィル、帝国館でレビューやジャズの演奏が増加した。これによって、映画館は「西洋音楽の生演奏を気軽に聴ける場」から多様なジャンルの

舞台を楽しめるエンターテインメントの場へと変化したと言える。この傾向は、1929年にトーキー映画が導入され、伴奏の必要がなくなって楽団解散が進んだことによって、さらに促進された。

結論

1916～29年の東京の14の映画館における演奏団体の動きを整理した結果、軍楽隊出身者が多く松竹系と日活系の映画館に所属したこと、武蔵野館ではロシア人の楽長の下で比較的楽士の入れ替わりが少なかったこと、それに対してその他の映画館では、船の楽士経験者を中心に楽士が複数の館を移りながら活動し、その一部が1925年以降交響楽運動に加わったことが確認できた。いずれの映画館においても、1920年以降楽団規模が拡大し、平均15名ほどのメンバーが「管弦楽団」「シンフォニーオーケストラ」という名称で活動した。映画館の休憩奏楽では交響曲の演奏は少なく、聴きやすい小曲が好んで取り上げられ、特に浅草においては人気のある曲が繰り返し演奏された。そのことによって洋楽の響きが人々の耳になじみ、さらには人気曲がピース楽譜として出版されて、当時の「洋楽」のイメージが形成された。

1920年代後半、洋画館では交響楽団に進む楽士が現れたのに加えて、ヴォードヴィルやレビュー、ジャズ等の演奏が行われるようになり、映画館でのアトラクションが多様化した。また邦画館では、和洋折衷の演奏スタイルから独自の映画音楽の編曲・作曲へと進んだことにより、洋楽曲の休憩奏楽は減少した。こうした動きは、大正中期に「洋楽」としてひとくくりにされていたものが、昭和に変わる頃、クラシック、軽音楽、通俗曲、ジャズ、映画音楽といったジャンルへと分化していく過程と捉えることができる。

これまで洋楽導入史において、映画館の音楽が語られる機会は少なく、またその演奏レベルも決して常に高くはなかった。しかし、今回記録で確認した14館で275名の楽士が、東京の各地で上映作品と地域の観客の好みに合わせて毎週演奏曲を選曲し、毎日数回の洋楽合奏を実践してきたという事実から、映画館の音楽はまさに東京の日常生活の中で、洋楽の受容と普及を推進する役割を果たしたと言えよう。

（本学教授＝音楽学担当）

参考文献

内田晃一　1976　『日本のジャズ史　戦前・戦後』東京：スイングジャーナル
大森盛太郎　1986　『日本の洋楽』第1巻　東京：新門出版社
楽水会（編）1984　『海軍軍楽隊　日本洋楽史の原典』　東京：国書刊行会
紙屋牧子・白井史人・柴田康太郎 2015「1920年代半ば以降の日活直営館における無声映画伴奏：「ヒラノ・コレクション」からみる伴奏曲目レパートリーの形成と楽譜配給」『演劇研究』39, 15-55
斎藤伸一　2002『セノオ楽譜目録　音楽図書館等の所蔵資料を基に』姫路：斎藤伸一
斎藤完　2018「邦楽座における日本交響楽協会（1927-1929）　トーキー前夜の映画館での演奏活動」『関西楽理研究』35, 15-32
柴田康太郎　2016「日活作曲部における松平信博の無声映画伴奏　純映画劇運動への音楽的応答」『演劇研究』40, 131-151；　2017「大正期の日本映画における伴奏音楽の「洋楽化」と純映画劇運動」『演劇研究』41, 17-34.
新宿歴史博物館（編・発行）1992『キネマの楽しみ　新宿武蔵野館の黄金時代』
シンフォニー楽譜（編・発行）［1930?］『シンフォニー楽譜総目録』
須藤元吉　1997　『明治の陸軍軍楽隊員たち　吹奏楽黎明期の先達』　安中：陸軍軍楽隊の記録刊行会
武石みどり　2005「明治・大正期の東洋音楽学校　演奏に関連する記録・資料」『東京音楽大学研究紀要』29, 27-48;　2006「ハタノ・オーケストラの実態と功績」『お茶の水音楽論集』特別号　363-373;　2007『音楽教育の礎』　東京：春秋社；　2018「1910～20年代の船の楽士　国内の洋楽受容・分化との関連」『東京音楽大学研究紀要』42, 1-24.
谷村政次郎　2010　『日比谷公園音楽堂のプログラム　日本吹奏楽史に輝く軍楽隊の記録』東京：つくばね舎
徳川夢声　1957　『くらがり二十年』東京：春陽堂書店
波多野鑅次郎　1942　「民衆音楽の時代を語る」『音楽之友』2/10, 100-105.
増井敬二　2003　『日本オペラ史（上）』東京：水曜社
山田耕筰 1996「山田耕筰手記（下）日響事件顛末記」『日本近代音楽館館報』16. 4-6.

一次資料

映画館週報（京都文化博物館　国立映画アーカイブ　コロンビア大学東アジア図書館　新宿区歴史博物館　立命館大学国際平和ミュージアム　早稲田大学演劇博物館）
波多野鑅次郎資料（個人蔵）
前田璣資料（個人蔵）

雑誌／雑誌記事

「楽長調べ」「代表的活動常設館洋楽部一覧」『活動画報』2/12（1918), 20-23

「西洋気分の金春館」『活動雑誌』5/10（1919), 162-163

「ユ社特作品『火の女』の間奏楽譜曲表 … by Mr.F.Hatano, Conductor of ‘K.T.H.’ Orchestra, Musical Director of Komparu-kan.」『キネマ旬報』29（5/1/1920), 9

「東洋キネマ音楽団同人合評」『活動画報』7/6（1923), 38-39

「武蔵野館音楽団同人合評」『活動画報』7/7（1923), 64-68

「浅草電気館音楽団合評」『活動画報』7/8（1923), 117-121

「楽士名簿」『日本映画年鑑　大正十三、四年』（1925）東京：朝日新聞社, 294-340

『映画音楽愚談雑誌　錯覚』（シネマパレス）1/1-6（1925), 2/1（1926）

データベース

海軍・陸軍軍楽隊データベース　（東京藝術大学音楽学部楽理科HP内）

東京音楽学校一覧（明治42年～昭和5年, 国立国会図書館デジタルコレクション）

楽譜（出版社別）

Carl Fischer *Concert folio* (191-?), *Moving picture folio* (1912), *Album of overtures* (1913),*Grand opera album* (1915), *Album of waltzes* (192-?)

Sam Fox *Library orchestra folio* (1915-19),*Concert orchestra folio* (1917-19)

Schirmer *G.Schirmer's concert album for orchestra* (1914)

（JSPS科学研究費・基盤研究(C) 18K00141による研究）